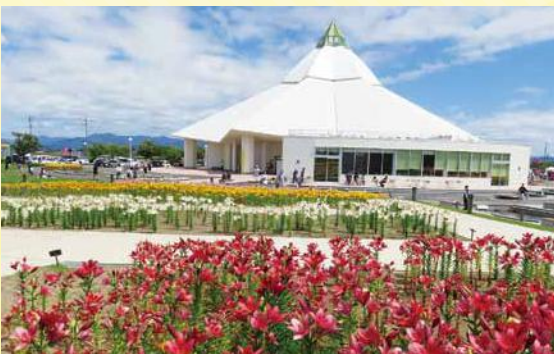


令和4年度

福井県小学校長教育研究 坂井大会研究紀要

2022 No.50



福井県小学校長会

**自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進**

－夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び
未来を生き抜く力を育成する学校経営－

研究紀要 No.50 (2022)

福井県小学校長会

全体会



分科会



第1文化会



第2文化会



第3文化会



第4文化会



第5文化会



第6文化会



第7文化会



第8文化会

目 次

挨拶	福井県小学校長会 会長 北 和 幸	5
祝 辞	福井県教育委員会 教育長 豊 北 欽 一	7
	坂 井 市 長 池 田 禎 孝	9

○ 大会要旨

大会主題・大会趣旨	11
大会日程	12
分科会概要	13

○ 分科会主題別研究

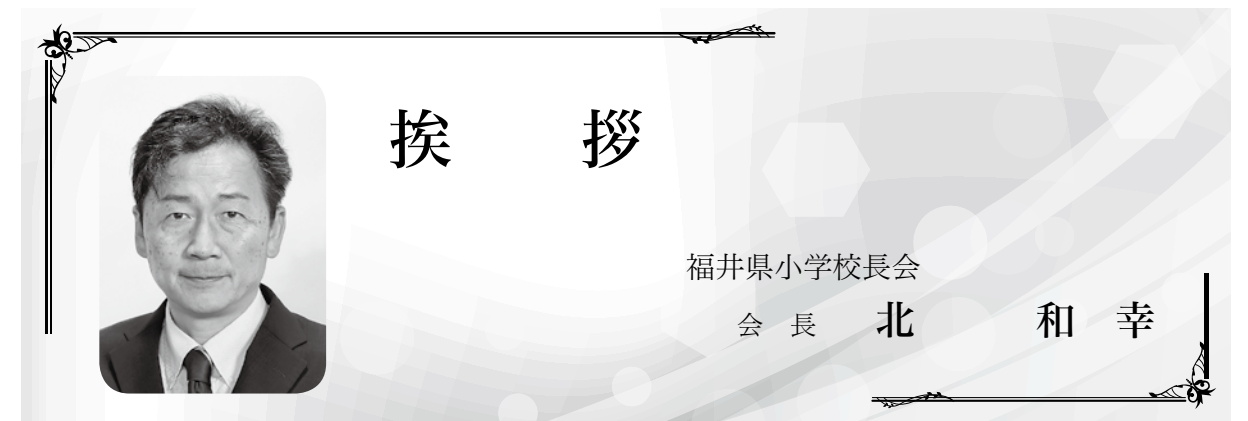
第1分科会	提案者	福井市文殊小学校	水 野 涼 子	16
第2分科会	提案者	おおい町立名田庄小学校	鹿 谷 佳 則	18
第3分科会	提案者	勝山市立野向小学校	田 邊 千 智	20
第4分科会	提案者	越前市南中山小学校	服 部 美 穂	22
第5分科会	提案者	敦賀市立敦賀西小学校	栗 城 信 市	24
第6分科会	提案者	福井市湊小学校	山 本 智 広	26
第7分科会	提案者	鯖江市片上小学校	五十嵐 靖 浩	28
第8分科会	提案者	坂井市立春江西小学校	井 口 敬 雄	30

○ 福井県小学校校長教育研究大会主題・副手題一覧表

32

○ あとがき

福井県小学校校長教育研究委員長 坂井市立磯部小学校 多 田 敏 明	34
-----------------------------------	----



皆様こんにちは。コロナ第7波の流行や残暑厳しい中、学校再開に向けて、感染症対策・熱中症対策・運動会や修学旅行などの各種学校活動をどうしようか？など、悩ましい決断を迫られる時期になってきました。

そんな中、本日、第74回 福井県小学校長教育研究坂井大会を、全国連合小学校長会の研究主題である「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」のもと、副主題「夢と希望の実現に向けて 主体的・協働的に学び 未来を生き抜く力を育成する学校経営」を掲げ、県下の校長先生方が参集して無事に開催することができました。坂井市、あわら市の温かいご支援とご協力の賜物と受け止めております。会員を代表いたしまして、深く感謝申し上げます。

また、先日の豪雨災害で被災された地区の校長先生方、北陸道の復旧が間に合わず、長い時間をかけて坂井市まで足を運んで下さった嶺南の校長先生方、今日は本当にありがとうございます。

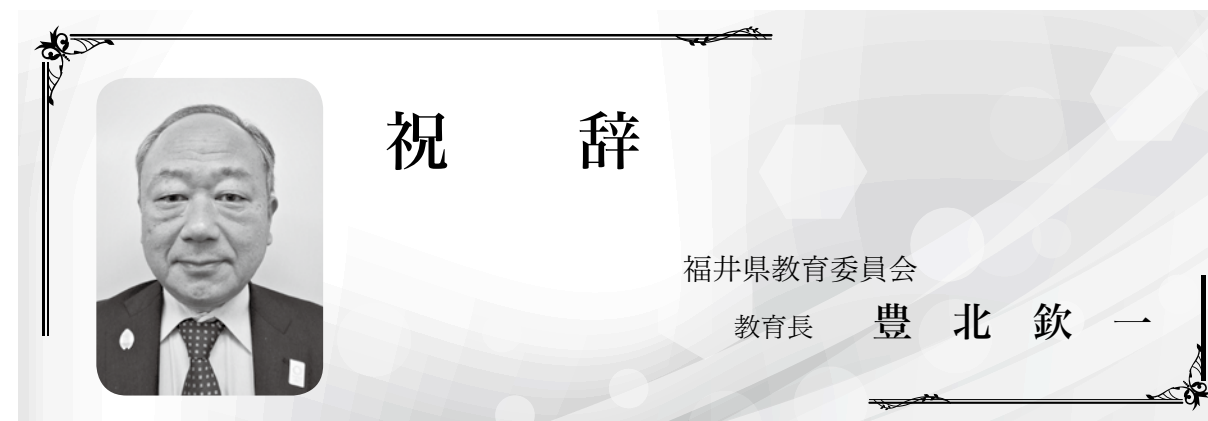
さらに、本日は、公務ご多用の中、福井県教育委員会教育長 豊北 欽一様、坂井市副市長 新開 和典様をはじめ、多くのご来賓の方々にご臨席を賜りましたこと、心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。

さて、7月1日、教員免許更新制が解消されました。それに伴い、文科省は「公立小学校などの校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針改正案」を示し、教師一人一人に必要な学びを主体的に行う姿勢を求めています。そして、校長自身に求められる資質能力も明確化され、教職員の資質向上などの人材育成の役割の他、様々なデータや学校が置かれた内外環境に関する情報について収集・整理・分析する能力「アセスメント能力」や学校内外の関係者の相互作用により学校の教育力を最大化する「ファシリテーション能力」が明記されています。



本日は、このような課題も含め、8つの分科会で、研究課題に迫る協議をお願いします。日頃、いろいろな問題に直面しその都度決断を迫られる校長先生ですが、今日は一人の悩める教育者として、どんどん愚痴や不安も出してください。情報交換し、共有・共感しながら各々の学校の子供たちや先生方の幸せにつながる研究会になればうれしいです。また校長先生が一堂に会して、これまでの研究実績を引きつぎながら、このような研修を継続して行うことが、校長としての力量をより一層高めるものと考えます。本日、提案を準備していただきました各校長先生方、本当に有り難うございます。今日はよろしくお願いします。

最後に、本研究大会に向けて、開催までの計画、準備や大会運営にご尽力いただきました坂井地区の校長先生方をはじめ、多くの関係各位に心からお礼を申し上げ、開会の挨拶といたします。



本日、183名の小学校長の皆様にご参加いただき、第74回福井県小学校長教育研究坂井大会が開催されること、心からお祝い申し上げます。

来週以降、学校再開とともに、小学生の感染者が急増することが危惧されます。保護者や児童に対し、感染対策を再認識してもらうよう働きかけをお願いします。

【今年の全国学力・学習状況調査】

全国学力・学習状況調査については、全国トップクラスを維持はしていますが、全国平均より低い小学校が46校と増加しています。全国学調の順位にこだわることは私の本意ではありませんが、学調がある以上は、「引き出す教育・楽しむ教育」を中心に据えながらも、「わかる喜び」というものを、子どもに感じさせることも忘れないでほしいと思います。

【不登校対策】

令和3年度の不登校の児童生徒数がこの秋に文科省から発表されますが、増加数が去年の3.3倍で、令和3年度は小中合わせて前年度の854人から1071人に大きく増えていると聞いています。学習がわからないことを理由に休む子も増えています。日頃から声かけやチェックを行いながら、自校の状況を把握し、教員全体で考えながら、改善に向けての対策を行っていただきたい。

【働き方改革】

今年、働き方改革の観点から教科担任制を拡充しました。結果、空き時間が増えて現場からは好評です。小学校の働き方改革として文科省に求めることは、多様な児童と向き合うためにも、「空き時間があって、ゆとりが感じられるような教員配置」でないかと考えます。

就任してから毎年行っている県教委指導主事との意見交換の中で、①通知表所見の廃止、②校則を見直して管理的な生徒指導の時間の削減、③校務分掌や担当業務の見える化、④職員会議の見直し⑤オンラインによる保護者面談の実施など、教員の中の「当たり前」の見直しや昭和の価値観からの脱却といった意見がありました。

私からは、次の3つのことを提案します。一つ目に、児童生徒との連絡ノートの簡素化、二つ目に、清掃の時間や学校行事等、児童生徒に任せるところは任せ、先生はサポート役に徹していくこと、三つ目は、近隣の小学校との協力による、行事等の企画運営の負担軽減です。各

校でこうした取り組みについて、話し合ってください。

働き方改革は周りの様子を見て行うものでも、市町教委の判断を仰ぐものでもありません。校長がリーダーシップを発揮して、教員の意見も十分に聞いたうえで、思い切った改革を進めてください。

【俳句コンクール】

5月14日、夏井いつきさんに「俳句を通した楽しい学校づくり」の講演をしていただきました。夏井さんが講演の中で話された、「できない理由を見つけるのが先生の得意技」とか、「褒める気があれば、どんな句でも褒められる」という言葉が印象的に残っています。講演後にいただいた色紙には、「楽しくなければ、俳句じゃない」と書かれていました。俳句コンクールへのたくさんの応募をお待ちしています。

【絵を通して引き出す教育楽しむ教育を進めるには】

昨年も今年も、「ふくい中学生アートリンピック展」を見て、中学生の力強い作品に驚きました。野村重存氏が書かれた「水彩画の手ほどき」という本には、各ページに動画のQRコードがあって、水彩画の描き方が基本的なことから事例をもとに学べるようになっています。各校で購入して授業等で活用してみてください。そして、絵を書くことが好きな子どもたちを育ててください。

【個別最適学びと協働的な学び】

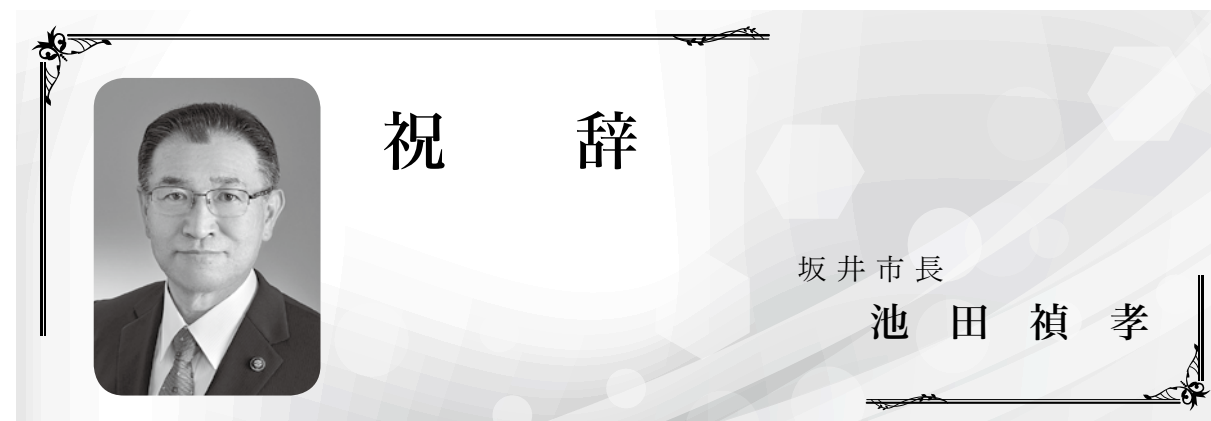
上智大学教授の奈須正裕氏の「個別最適な学びと協働的な学び」という本には、山形県の小学校で実践された、「仲間と教師で創る授業」に加え、「自学・自習」「マイプラン学習」「フリースタイルプロジェクト」という、子どもたちが自立的に学び進める三種類の学習について紹介されています。興味があったら読んでみてください。

【図鑑を活用した学び合い】

教育評論家の親野智可等さんの「頭がいい子の図鑑の読み方・使い方」という本には、「図鑑は、勉強嫌いな子でも、勉強好きになるツールで、広く・深い知識が身につき、考える力が育つ。図鑑で、どんなことにも前向きに取り組む心を育む。」ということが書かれています。学校図書館にある図鑑を活用し、総合的な学習の時間等にタブレットPCを使い「クイズ大会」を行ってはどうでしょう。全員が作ったクイズを全員で解答し、出題した児童は正解の理由やコメントを説明するような、子ども同士で学び合うことも面白いのではと思います

本大会は「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を主題とし、8分科会に分かれて協議がなされると聞いています。活発な協議が繰り広げられる中で多くの学びが得られることを期待します。

終わりに、今大会の成功と福井県小学校長会のますますのご発展、そして皆様方のご活躍、ご健勝をご祈念申し上げまして、お祝いの言葉といたします。



令和4年度第74回福井県小学校長教育研究坂井大会が盛大に開催されますこと、心よりお喜び申し上げますとともに、坂井市を代表し、深く歓迎の意を表します。また、感染症の収束が見通せない中、子どもたちが健康で安全に学習やスポーツ・文化に取り組むことができるよう、きめ細かなご配慮とご工夫をいただいておりますことに対し、敬意を表しますとともに感謝申し上げます。

さて、本大会の趣旨にも示されておりますように、子どもたちを取り巻く環境がこれまで以上に多様化・複雑化する中、少子化や人間関係の希薄化は本市にとっても大きな課題と捉えており、ふるさと学習は、学校教育の中でも特に重要であると認識しています。

本市の場合、三国祭や丸岡城といった伝統文化や歴史遺産に関わる取組の他に、各校が地域とともに地域の特色を生かした活動を行っていますが、本年度は、企業との連携によるキャリア教育の充実につきましてもお願いをしているところです。子どもたちが目で見えて触れて五感で感じる発見や感動を味わうことは、ふるさとへの誇りや愛着を感じるだけでなく、社会の一員としての自覚を持つことにつながります。さらに、地域の課題を発見し地域の方々と協働して解決することは、当事者意識を高めることにつながります。こうした経験の積み重ねによって、今後の地域社会や産業を支える担い手、あるいは、国際社会の発展に貢献しようとする人材の育成が図られるものと考えています。

このような取組は県内全域でなされていると承知しておりますが、今後さらに発展していただき、地域を活性化し豊かな社会を創る存在として子どもたちを育てていただきたいと願っています。

また、ここ坂井市は、東尋坊や丸岡城などを有する「観光のまち」であります。今年3年ぶりに三国祭りや三国花火が開催されました。おいでになられた皆様の表情は大変明るく活気に満ちた内容でありました。また、本年4月には三国港市場が生まれ変わり、新鮮な魚介類やいちほまれ、若狭牛などの豊富な食材を味わうことができる「食のまち」でもあります。ぜひこの機会に坂井市の豊かな自然や歴史、食文化に触れていただき、ご堪能いただければ幸いに存じます。

結びに、本大会の成功とご参加の皆様方のご健勝、今後のご活躍をご祈念申し上げます。



令和4年度 第74回福井県小学校長教育研究坂井大会実施要項

- 1 大会主題 「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進」
ー夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び
未来を生き抜く力を育成する学校経営ー

2 大会趣旨

今日の知識基盤社会においては、先端技術の高度化やグローバル化により急激な社会変化が進み、あらゆる分野で価値観も多様化してきている。また、新型コロナウイルス感染拡大による生活様式の変化やGIGAスクール構想の前倒しなどにより、学校生活の当たり前も大きく変わろうとしている。さらに、少子高齢化や人間関係の希薄化、家庭教育力の低下や人権・貧困問題等、子供を取り巻く社会的要因も複雑に絡み合い、変化の激しい予測困難な現象や社会問題が出現している。こうした混沌とした社会情勢の中で、新学習指導要領では、教育の目的として、産業が発展し環境が保護され様々な民族・文化が共存できるような「持続可能な社会」の創り手となる子供の育成が明示された。

そこで学校教育においては、「社会に開かれた教育課程」の実現を通して、確かな学力、豊かな人間性、健康と体力の調和を重視した「生きる力」を育むことが責務となる。社会の質的な変化に主体的に向き合い、自らの人生やよりよい社会を創造していくために必要な資質・能力の育成が要請されるようになったのである。

特に、人間形成の基礎を培う小学校教育においては、子供たちが目標を明確にし、互いに切磋琢磨しながら主体的・協働的に学び、対話を通して多様な他者と協力して新たな価値を生み出すことが重要である。また、人間性を育みながら地球的規模の視野や人とのつながりを大切にした生き方を確立して、未来を切り拓くために努力することが大切である。つまり、人間関係形成力の育成を基にした思考力・判断力・表現力の育成とともに、主体的に学習する態度を含め、知識の構造化と思考の展開を推進する原動力である「学びに向かう力」の涵養が求められているのである。

そのためには、まず一人一人が志をもち、可能性に挑戦する態度と豊かな知性と感性に裏打ちされた人格形成を図りながら、「夢と希望」を育むことが大切である。そして、「夢と希望」をもつことが礎となって、子供たちは学ぶことの意味や価値を見出し、難しいことにも立ち向かい、最後までやり遂げることで自己実現を目指すことができる考える。様々な情報に振り回されることなく的確に判断し、粘り強く相互に理解し合い、ともに生きていくことができる道を探っていくことが極めて大切となる。

そこで、全国連合小学校長会研究主題を受け、副主題を「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び 未来を生き抜く力を育成する学校経営」と設定した。そして、全連小大会・東陸連小大会における13分科会を、福井県の学校数等より、下記のような福井型8分科会に編成して校長の役割を究明していく。

- | | | | |
|----------|------------|------------|-----------|
| (1) 学校経営 | (2) 知性・創造性 | (3) 人間性・健康 | (4) 人材育成 |
| (5) 危機管理 | (6) 社会形成能力 | (7) 自立と共生 | (8) 連携・協働 |

私たち校長は、これまでの福井県における研究・実践の積み重ねを基にして、教育の普遍的使命や新しい時代の要請に応え、未来をたくましく生き抜く子供の育成を目指した学校教育の創造と推進に努めていかなければならない。

- 3主 催 福井県小学校長会
- 4後 援 福井県教育委員会
坂井市 あわら市 坂井市教育委員会 あわら市教育委員会
- 5日 時 令和4年8月25日（木）13時30分 開会
- 6会 場 全体会：ハートピア春江
坂井市春江町西太郎丸15-22 TEL(0776)51-8800
分科会：坂井市立春江中学校
坂井市春江町江留中15-15 TEL(0776)51-0188

7 日 程

時刻	10:30～ 13:00	13:00～ 13:30	13:30～ 14:00	14:00～ 14:20	14:20～16:20
内 容	打合せ会等 （運営委員 司会者 提案者 記録者）	受 付	開 会 式 （全体会）	移 動	分 科 会 （閉会式）
会 場	春江中学校	ハートピア 春江	ハートピア 春江	春 江 中 学 校	

- 8開 会 式
- （1）国歌斉唱・新県民歌斉唱
- （2）挨拶 福井県小学校長会長 北 和幸
- （3）来賓祝辞 福井県教育委員会教育長 豊北 欽一 様
坂 井 市 長 池田 禎孝 様
- （4）来賓紹介

9 分 科 会

（1）研究領域・研究課題・研究の視点・会場

分科会 研究領域	研究課題	研究の視点	会 場
第1分科会 学校経営	創意と活力に満ちた学校経営	(1) 将来を見据えた魅力ある学校経営ビジョンの策定と推進 (2) 学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりと学校運営 (3) 学校教育の充実を図るための評価・改善の推進	1-1 教室
第2分科会 知性・創造性	知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントの推進	(1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けたカリキュラム・マネジメント (2) 知性・創造性を育む教育課程	1-2 教室
第3分科会 人間性・健康	豊かな人間性や健やかな体を育む教育課程	(1) 豊かな心を育成する教育課程のマネジメント (2) 健やかな心身を育む教育課程のマネジメント	1-3 教室
第4分科会 人材育成	学校の教育力を高める研究・研修とミドルリーダーの育成	(1) 学校の教育力を向上させる研究・研修の推進 (2) これからの学校を担うリーダーの育成	1-4 教室
第5分科会 危機管理	子供を取り巻く様々な危機への対応	(1) 自らの命を守る安全教育の推進 (2) 危機管理能力の育成と未然防止に向けた組織体制づくり	1-5 教室
第6分科会 社会形成能力	社会形成能力を育む教育の推進	(1) 社会の発展に貢献する資質や能力を培う教育活動の推進 (2) 地域に愛着をもち、よりよい社会の創造に貢献する力を育むキャリア教育の推進	1-6 教室
第7分科会 自立と共生	自立と共生の実現に向けた教育活動の推進	(1) 子供の自立や社会参加に向けた特別支援教育の推進 (2) 共に生きる社会の実現に向けた資質・能力を育む教育の推進	1-7 教室
第8分科会 連携・協働	家庭や地域との連携・協働と学校段階等の接続の推進	(1) 家庭・地域等と連携・協働を深め、創意ある教育活動を展開する学校づくりの推進 (2) 学びの連続性を重視し、学校段階等間を円滑に接続する組織的な取組の推進	1-8 教室

(2) 司会者・提案者・記録者・運営委員

分科会	研究領域	司会者	提案者	記録者	運営委員
1	学校経営	越廼小学校 宇野 泰裕	文殊小学校 水野 涼子	鶉小学校 高間 春彦	兵庫小学校 中谷 滋
2	知性・創造性	大島小学校 新田 美樹	名田庄小学校 鹿谷 佳則	内外海小学校 淵上 美千江	平章小学校 中屋 秀志
3	人間性・健康	荒土小学校 前野 英治	野向小学校 田邊 千智	鹿谷小学校 北川 喜樹	鳴鹿小学校 山田 俊行
4	人材育成	北新庄小学校 宮本 賢司	南中山小学校 服部 美穂	武生東小学校 冨田 政晴	雄島小学校 矢部 正道
5	危機管理	沓見小学校 木下 達也	敦賀西小学校 栗城 信市	黒河小学校 柿本 陽子	三国北小学校 佐藤 美紀代
6	社会形成能力	酒生小学校 松村 聡	湊小学校 山本 智広	社南小学校 萩野 昌映	伊井小学校 堂下 敬子
7	自立と共生	河和田小学校 澤田 博孝	片上小学校 五十嵐 靖浩	吉川小学校 鳥居 秀行	芦原小学校 中嶋 英雄
8	連携・協働	春江東小学校 板庇 貴美恵	春江西小学校 井口 敬雄	大石小学校 小林 佳世	春江小学校 中村 敏明

分科会主題別研究

研究課題 創意と活力に満ちた学校経営

研究発表題 学校組織運営に有効な校長の関わり
～ 主体性・協働性を育む学校組織を目指して ～

福井市文殊小学校長 水 野 涼 子

Ⅰ 研究の視点

「よりよい学校教育」を営む学校は、子どもや教職員、家庭・地域にとって魅力のある学校でなくてはならない。つまり、子どもにとって学校が楽しく、教職員にとって働きがいがあり、家庭・地域にとって信頼のある親しみのある学校であると考え。学校に関わる人それぞれにとって、学校は「自己実現の場」であり、互いを認め合える場であってほしい。時代や環境、メンバーが変わっても学校組織として成り立つためには、構成するメンバーが、①互いに共有した目標や方策に向かい、②有効にP D C Aサイクルを機能させ、③実現に向けて主体的・協働的に参画できる組織と考える。これらを具現化できる組織風土を醸成するために、以下のことを念頭に研究を進めることとした。

○教育活動の主体である子ども、子どものロールモデルとなる教職員、家庭・地域の意識が高揚し、それぞれの資質・能力を発揮し続けることが可能な学校経営ビジョンの策定と実施。

○子どもや教職員、家庭・地域が、主体的に提案し協働的に取り組める活動や場の設定。

Ⅱ 研究の概要

(1) 目標や方策を共有するために

学校運営に教職員の参画意識を高め、主体的に学校教育活動に取り組むことをねらい、目標や方策などを共有する時間や場所を設定した。

①校長講話の利用

スクールプランの実現に向けて、校長講話は、子どもも教職員も、目指す子どもの姿や現状の課題を共有できるように計画的に行った。校長が教職員や子どもたちに「何を期待しているか」「何を学んでほしいか」を明確にしながら講話を行うこととした

②教職員の「語り合い」「学び合い」の場

普段から気軽に語り合える時間と場所の共有として、週に一度の30分間の「かたり場」の設定。

・授業における教師の支援やファシリテートの在り方

・互いの強みを生かしたミニ研修会

・共通理解のための「まるわかり！文殊小学校」

・授業づくりのための「文殊スタンダード」

子どもの姿から語り合うことは、気軽に話し合え、身に付けさせたい資質・能力が明確になった。

③次年度へつなぐ継続的な取組

来年度に向けて、学校評価を中心に教育目標の精察や学校の特色を考えることを通して、スクールプラン作成を学校全体で取り組むように計画的に進めた。

(2) 主体性を育む場の設定

「やりたい」「やってみよう」と思うことは、「実行する」こと、失敗も「経験」になる、トライ＆エラー精神をすすめた。全教職員が、OODAループも活用し、提案性をもって主体的に協働的に取り組むようにした。

①教職員と児童の協働

○校内音楽集会の取組

子どもたちの「実行委員会」の立ち上げから始まり、企画・運営を子どもたちの手で行った。

○ありがとう集会

「できないからやらない」を「どのようにしたらできるか」という視点の変換により、多くの地域ボランティアが集まる温かな集会が行われた。

②学校と家庭・地域との協働

感染対策を行いながらも家庭・地域の願いや思いと学校のねらいを明確にして進めることで、教職員の多忙感解消と業務改善につなげる。

Ⅲ まとめ

(1) 成果

- ・風通しの良い職員室
- ・教職員・地域の学校運営参画意識向上
- ・常に課題を見つけて更新

(2) 課題

- ・時間の確保
- ・教員の主体性の一層の向上と持続
- ・長期目標と短期目標の見定め

校長は、教職員や家庭・地域と対話を重ねることで意思疎通を図る。そして、組織全体で課題を見つけ共有し、解決に向けて提案性と見通しをもって進めていけるよう推進していかなければならない。

◎研究協議内容

中谷 参考にしたいと思うところがたくさんあった。校長講話のところで、講話のあとに、子どもたちにGoogle Formsでアンケートを書かせるというのがあったが、子どもたちにはいつの時間にどのように書かせたのか？

発表者 そのときはZoomで朝礼をしていたので、担任の先生のお話が終わった後に、すぐに書いてもらった。そのとき、AIテキストマイニングで処理することも担任に伝え、「短い言葉でまとめるように」と伝えた。

竹中 子どもたちが身につけるべき資質能力というのをすごく重要視しているというのが分かったが、子どもたちが、それを本当に身につけているかを、どのように評価しているのか。また、評価規準のようなものはあるか。

発表者 活動のときに振り返りのようなものは、必ず書かせている。子どもたちは自分たちの目当てを持って振り返りを書いているし、避難訓練のような場合には、ねらいを伝えたくて書かせている。評価規準というのはなく、子どもたちが書いたものに、返事を書いたり認めたりということをしている。

◎グループ協議内容

A 教育目標については、どうしてもトップダウンになりがちだが、持続可能な学校運営を行うために、教職員とともに考えていく必要がある。それには、何でも言い合えるような職員室の雰囲気が大切だと感じた。また、教職員の学校評価についても、A B Cとつけるだけでなく、文章で書くことによって、参画意識が高まるという話があった。今後、どの学校でも若手の教員が増えていき、サポートするうえで面談を大切にしたいが、大規模な学校では面談をするだけでもなかなか大変だという悩みがあった。

学校行事の実施方法の変更については、コロナ禍の今こそ「本当にその行事が必要か」ということを考えるよい機会だという意見が多かった。ただし、やめる場合には、学校間でバラバラにならないように校長会で話し合うことが大切だという意見もあった。

B 教育目標については、面談で個々に、主任会で主任になど、校長が立ててから伝えるのが多かったが、教育目標の具現化については、教職員にそれぞれ考えさせる学校が多かった。

学校行事の実施の可否や方法については、例えば、バザーで食品や農作物を販売することの是非など、コロナ禍で見直しを迫られている。P T Aとも十分話し合い決定することが必要。話し合いは大変だが、体育大会での参観の規制については、規制を守らない人に役員が注意してくれるようになるなど、成果

もあった。これから修学旅行もあるが、子どもたち自身がきまりを考えるなどして、感染対策を徹底していきたい。

C 教育目標については、全体に示す前に部会ごとに下ろしたり、核になる教員と相談したりはするが、どうしてもトップダウンになりがち。どう示すかよりも示した後で見直しをするとか、様々な行事の起案のときに教育目標を踏まえているか検討するとかが大切だと思う。

学校行事については、なかなか新しい提案も出てきづらいが、コロナ禍の中でP T Aなどとも協力してやったもので成果が上がっているものもある。例えば、これまで道路を利用していたマラソン大会を競技場でやったところ、「参観しやすく、バス代を負担してでも続けてほしい」という声が上がったり、P T Aの親子ふれあい学級をネットでクイズを解く形にしたところ、親子で盛り上がりたりと、各校で工夫していることが報告された。

D 教育目標については、年度途中から見直しを行い、目指す児童像を共有するなど、教職員全員が次年度の作成に参画できるようにしている学校が多いように感じた。

コロナ禍での学校行事については、修学旅行などの行き先など悩むことが多いが、校長がすべて判断するのではなく、教職員や子どもたち、保護者に主体的に考えてもらうチャンスとして捉えるべきだという意見もあった。ベテランの教員は、行事について今まで通りでよいと考えがちだが、チャレンジをさせていきたい。美浜の学校で新しい食文化づくりに小学校が参画し、キャリア教育の柱にしているという話があり、感銘を受けた。



(文責：福井市鷗小学校 高間 春彦)

研究課題 知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントの推進

研究発表題 ふるさと教育を基盤にした、カリキュラム・マネジメントの推進

おい町立名田庄小学校長 鹿谷 佳 則

I 研究の視点

学習指導要領においては、「教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」「教育活動の質を向上させ学習効果の最大化を図るためにカリキュラム・マネジメントを確立させる必要がある」と示されている。そこで、知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントを推進するためには、教科等横断的な視点をもとにして教育課程を編成することが必要であり、それを校長のリーダーシップの下、実施していくことが重要となってくる。

郡内小学校で各校の状況に応じた独自の取組を進めながら、評価・改善を図ってきたことを述べる。

II 研究の概要

福井県から、ふるさと福井を愛するふるさと教育の推進が提唱されたことを受けて、各校で地域の教育資源を活用しふるさとに対するより深い学習を進めてきた。

1 年間カリキュラムの見直し

総合的な学習の時間や生活科、各教科の年間カリキュラムを見直し、本単元や本題材がどの教科と関連し、どの単元でどの時期に実施することが適切かを確認し年間を通して見直しをもって学習を進められるようにした。特に、ふるさと学習においては総合的な学習の時間との関連が深く、各教科との関連を中心に見直しをしながら、計画を立てた。

2 教科等横断的なカリキュラム・マネジメント

(1) 国語科と社会科との関連

大豆の流通を知るためにスーパーマーケットの見学を行った。スーパーマーケットの流通の仕組みを知ることができ、児童にとって次の学習への意欲付けにもなり、意義ある体験活動であった。

(2) 国語科と総合的な学習の時間との関連

地域の老人クラブの方々の協力の下、大豆を栽培し、地元で味噌を作っている方を講師に迎え大豆を使って味噌作りを体験したり、栄養教諭の指導の下、豆腐作りの体験を行ったりした。

体験活動を伴うことで学習内容の理解を深めることができた。

3 ふるさと教育の推進

(1) 「ふるさと教育主任」の新設

郡内にも、ふるさと教育を推進していくために、「ふるさと教育主任」を新設する学校も出てきている。今後は「ふるさと学習推進計画」を作成するとともに、内容、教材、協力者等について明確にし、系統的に指導できるようにマネジメントすることも校長の役目だと考える。

(2) 地域と連携した実践

地元農家の方の協力を得てサツマイモの苗植え・収穫、田植え・稲刈りを体験した。近隣のこども園に出向き方法などを参考にし、初めてのヤキイモ大会を実施したり、田植と稲刈りの体験後、改めて農家の方に来校してもらい話し合う時間を設けたりした。学校だけではできない体験を地域の方の協力を得て実施でき、改めて地域との連携の重要性を感じることができた。

III まとめ

1 成果

- (1) 校長自身が直接関わることで、学校全体の信頼につながり、地域の方々の協力が大きくなった。
- (2) 子どもたちが、自主的に学習に取り組み、学習に対する意欲も高まり、より深い学習につながった。
- (3) 教科等横断的なカリキュラムを見直すことで、教員同志のつながりが強くなり、学年を超えた連携も見られるようになった。

2 課題

- (1) 学校全体として地域との信頼関係を築くことができるように、校長が働きかけていく必要がある。
- (2) カリキュラムの見直しを、スクールプランと関連させながら、学校全体の取組となるように校長が働き掛ける必要がある。

◎研究協議内容

吉村 年間カリキュラムを設定することで縛りがでてこないか。

発表者 本校はもちろん、おい郡内で「ふるさと教育」に取り組んでいる。年間カリキュラムについては、担任の思いもあり、それらをすべて盛り込んだ計画を立てるものの難しさがある。最初から完成したものではなく、幅を持たせた計画を立てることが大切である。何年もかけて見直しや修正していくことで編成していく。

齋藤 A 体験後に地域の方に来校してもらい交流を図ったことが有意義だと感じた。子どもたちの交流時の反応がうかがいたい。

発表者 子どもたちの方から、お世話になった方の話を聞きたいとの要望があった。話を聞くことで「農業の根幹」に関わること（金銭面、農業の大変さ）を直接感じることもできた。実際、収穫した米を袋詰めする時に、一粒ずつ丁寧に袋に入れていた。子どもたちの収穫物に対する思いの変化が見られた。

齋藤 A 双方向で思いが伝わった交流であった。いろいろな喜びが絡んでいくイメージだと感じた。

田邊 焼き芋大会の事例で、コロナ禍の中で校長自ら「できることをやる」というリーダーシップの素晴らしさを感じた。校長の役目は、コロナ禍でリスクを考え「止める」ことばかりでない。

齋藤 S ふるさと主任・担任などの思いをどのように取り入れて年間カリキュラムを作成しているのか。他校での実践であるので、答えにくいと思うが。

発表者 他校の実践であるので、どのような工夫をしているのか分からない。今後、各校でも実践していけたらと考える。私が校長として危惧しているのは、今まで校務分掌で担当のあった「総合的な学習の時間」や「生活科」の主任が「ふるさと主任がいるのなら。」と手を離してしまわないかということだ。おそらく「ふるさと部会」等、何かしらのチームを組織して実践を積み重ねていると予想される。



◎グループ協議内容

A

- ・E S Dカレンダーを作成している。子どもたちや担任の思いの整合性など見直しを図っている。
- ・勝山市はふるさと教育が盛んで市全体で取り組んでいる。前年度踏襲型に陥らないように、大テーマを設定し大まかな流れを作っている。
- ・福井市では、ふるさと教育が予算化されている。また、一覧表が作成されており、市全体で明示されている。学校間の異動があっても取り組めるように工夫されている。前年度踏襲型とならないように、毎年見直しを図っている。

B

- ・校長が地域との連絡を密にすることで、職員の負担軽減につながる。
- ・毎年、同じようなことをやっていてもおもしろくない。校長として「やってみたいこと」を提案することも必要だと考える。
- ・農業従事者の高齢化により、体験活動の持続が不安。
- ・校長はアドバイザーやサポーター的な役割を果たしたいと思う。

C

- ・目的やねらいの明確化。対話することも校長の役割。
- ・学校の歴史が浅く、伝統的な独自性が薄い。「ふるさとは何か。」本質的な問いを基にふるさと学習を進めている。
- ・3年5年のスパンの考えで教材開発が必要。同じ発表の繰り返しでは問題がある。
- ・校長は地域を深く理解し、誰よりも地域の愛着を持つ。

D

- ・総合の年間計画は白紙から始める。児童の「なぜ」から始まる探究学習としている。
- ・体験で終わっていないか。驚きや感動は与えられているが将来に繋がっているのか疑問がある。
- ・カリキュラムに仕組む内容がすでに決まっているため、新しいことを入れ込む余地がない。(地域の力に助けられているのだが。)
- ・同じ内容でもテーマやめあてを考えさせ、主体的に取り組むように働きかけている。

(文責：小浜市内外海小学校 淵上 美千江)

第3分科会 // ー 人間性・健康 ー	
研究課題	豊かな人間性や健やかな心身を育む教育課程
研究発表題	スポーツライフを楽しむための 基礎を身につけた児童を育成するために
勝山市立野向小学校長 田 邊 千 智	

I 研究の視点

一昨年からの新型コロナウイルス感染防止対策により体育的行事や活動は中止や制限下での実施となった。運動する機会が減り、二極化が一層進むこのような状況下においては、児童が実際に運動することの楽しさや充実感を味わう機会を意図的に設けなければ、生涯スポーツに親しみ、運動を続けることのよさを実感することは難しい。そこで、学校教育では楽しい体育授業を実践すること、全校的な体力づくりを推進すること等で子どもたちが運動を楽しめるようにしていく必要がある。校長はこのような認識をもち、感染症や熱中症への対策をしながらも体育の授業や体育的な活動等を教育課程に適切に位置付け、全教職員の共通理解のもと積極的に取り組めるようなカリキュラム・マネジメントに努めなければならない。以上の視点に立ち、児童の豊かなスポーツライフに関わる教育活動を推進するための校長の果たす役割と指導性について考える。

II 研究の概要

感染症対策と業務改善の動きのなかで、行事の在り方や必要性について考えざるを得ない状況になっている。そこで、勝山市小学校体育連盟（小体連）と勝山市校長会学校運営研究会（校長会）とが連携を取りつつ、実施の方法を模索した連合行事と県の施策を取り入れながらそれぞれの学校が取り組む体力づくり推進の事例を紹介する。

- （1）勝山市連合体育大会の存続や内容についての検討
- ① 連合体育大会が抱える課題の洗い出し
 - ・学校規模の違いによる運営の困難さ
 - ・連合体育大会の存在意義
 - ・熱中症対策等を含めた児童・職員の負担感

- ② 課題についてのアンケートの実施と分析
 - ・全児童、保護者、教員へのアンケート
- ③ アンケートを基にした原案の作成
 - ・今後も環境や児童の実態に合わせて柔軟に競技内容を変更しながら継続して実施
- ④校長会での検討
 - ・小体連の意向最大限に尊重しての支援
- ⑤ 新しい連合体育大会の在り方について
 - ・小体連と校長会が連携を密にして共通の目標をもつことでよりよい在り方を協議

（2）オンライン記録会の開催

- ① 連合体育大会の中止を受けて実施
- ② オンライン記録会の成果と校長のリーダーシップ

（3）地域のスポーツイベントの活用

- ① 勝山市のスポーツイベント
- ② 参加実績と体育の授業との関連

（4）教育課程の中に位置付けた体力づくり

- ① 「勝山市体位・体力の向上」の取組
- ② 勝山市で継続している体力づくり

III まとめ

学校の限られた教育課程の中で何に重点を置くかは校長の裁量である。しかし、生涯にわたって健康であるための体力や運動習慣は生きる力の根幹をなすものであり、校長として体力づくりや運動に親しむ時間を確保して子どもたちの生涯にわたるスポーツライフの扉を開くことは極めて重要である。そのためには、職員の意見に耳を傾けながら、目的を明確にした上で、理解を得、校長の強いリーダーシップを発揮することが必要であると考える。

◎研究協議内容

田倉 コロナ禍で業間体育を中止している学校も多いが、勝山市ではどのような工夫をしているか。

発表者 グラウンドのトラックを走る時にはスタート位置を学年ごとに変える、学校周辺の安全な農道などに外周コースを設定するなどの密回避を行っている。また、縄跳びや体幹トレーニングなど活動の種類を増やして、教室や体育館などに分散して運動できるように工夫している。

加藤 私たちの地域でも連合体育大会について、学校規模が違いすぎるため、開催方法を再検討している。勝山市ではどのような工夫をしているか。

発表者 児童数が多い学校は出番の少ない児童も多いため、全員80m走と全員参加の8の字跳びを種目に加え、児童の出場機会を確保している。

逆に児童数が少ない学校は、単学年でリレーを組めないこともあるため、同程度の規模の学校でレースを行っている。新型コロナウイルス感染症対策としては、開・閉会式を取りやめて密を回避し、午前中開催として昼食をとらないようにした。

西本 連合体育大会を中止にした令和3年度に実施した、オンライン記録会の内容や方法を知りたい。

発表者 複式学級のある小規模校3校で連携し、3小学校のグラウンドをタブレットでつなくオンライン記録会を計画した（Google meetにて）。タブレットの画像は大型モニターに映し、互いの競技の様子を順番にライブ配信し、記録も共有するという方法である。ただし、400mリレーについては若干のズレは承知の上で同時スタートとし、モニター上の他校チームと実際に走る本校チームとで競い合うこととした。

なお、当日は事情で2校での開催となったが、モニターを介して交流もでき、大変盛り上がった。

無量小路 様々な大会を地域移行しているが、市スポーツ協会との連携はうまくいっているか。

発表者 小体連が市スポーツ協会の加盟団体であり、常に連携している。例えばかつては小体連行事だった水泳大会は市スポーツ協会主催の水泳記録会に移行したが、代わりに小体連から10名程度の競技役員を出し、運営に協力している。

◎グループ協議内容

A

- ・学校生活の中で「場所の確保」「時間の確保」「運動に使える用具を身近に整備」するよう工夫し、積極的に楽しく遊びながら体力づくりができる環境を整えている。
- ・体育授業を参観し合いながら先生方が学び合えるようカリキュラムを工夫し、専門性の高い教員を生かして先生方のスキルアップを図っている。
- ・連合体育大会の意義はもちろんあるが、それが先生方の負担になる側面もある。越前市の試みのように、陸上競技にこだわらず、地域指導者と連携しながらニュースポーツ大会に移行していくのも、すばらしい試みだ。子供たちは運動の楽しさを感じられ、外部人材とのつながりの中で成長できる。

B

- ・私たちの地域では市のスポーツ協会と連携して少年少女スキー大会を実施している。特色ある学校体育を残していくことも校長の役割である。
- ・各種体育大会の地域移行も含め、校長会で地域とのつながりを重視しながら改革を進めてきた。人材バンクの活用も含め、連携や協働を重視している。

C

- ・子供たちの体力低下を感じており、学校間で差はあるが、工夫して業間体育を取り入れている。
- ・体育でも教科担任制を導入し、専門性の高い教員が1年生から体育授業を担当し、学年に応じた系統性を持った授業を行っている。

D

- ・連合体育大会については、自分たちの地域でも同じく課題意識を持っている。校長会として、その目的や意義を再検討し、より良い在り方を探っている最中である。
- ・体力づくりに校長としてどう関わっていけるかを校長会でも議論している。子供たちがめあてを持ち、自立的、協働的な取組ができるよう、工夫したい。



（文責：勝山市立鹿谷小学校 北川 喜樹）

研究課題	学校の教育力を高める研究・研修とミドルリーダーの育成
研究発表題	ミドルリーダーを活用した学校の教育力向上を目指して
越前市南中山小学校長 服 部 美 穂	

I 研究の視点

「魅力ある学校づくり」において教員の人材育成は喫緊の課題である。しかし、令和3年度福井県小学校長会の調査研究報告書でも明らかなように「働き方改革」により残業時間を削減しなければならないため、今まで以上に時間の確保が難しくなっている。限られた時間の中で効率よく成果を上げるためには教員のモチベーションアップが不可欠である。また、教育課題の多様化に伴い、チームとして解決に当たる場面も増えており、コミュニケーション能力やコーディネート力の向上も求められている。

本校には複数のミドルリーダーがいて、活発にコミュニケーションを取っている実態がある。職員室でのミドルリーダーのやりとりが学校全体に影響に及ぼしている場面が少なからずある。そこで、ミドルリーダーが研究・研修の推進役となり学校全体の実践的力量を高める取組を通して、ミドルリーダー自身の育成も図りたいと考えた。

II 研究の概要

① 研究・研修を推進するシステムづくり

日課表を見直し、全校5時間放課の日を月2回設けたり、集団下校にしたりすることで業務時間を確保した。地域人材を活用し、クラブ活動は全て外部講師を招き、見守り隊を増員して登下校指導を軽減した。赤米奉納など赤米関連学習やオリンピック壮行会なども自治振興会と連携して実施した。

事務処理の統一化を図り、学級担任が共通の様式で集金伺い書を作成し、それを基に事務職が集金明細を作成して処理している。また、学年便りは教務が行事関係を担当し、学級担任の連絡事項等と合体して作成している。

さらに、職員室を機能的なレイアウトにした。動線に考慮した収納や文書配列にし、低・中・高学年が向かい合わせで机を配置し、すぐに報告・連絡・相談ができるようにした。

② 研究体制の整備

研究主任は教務主任が兼任し、副研究主任はミドルリーダー2人体制で授業改善チームとGIGAチームの各リーダーとして研究を推進している。研究方針を提示し、研究内容及び研究方法はミドルリーダーに一任した。また、特

別支援教育コーディネーター専門研修で特別支援教育センターと福井大学の指導助言を受けている。特に福井大学の笹原未来准教授の「協働による研修のあり方とミドルリーダーの役割」を参考に、「実践と省察の往還・思考の言語化」を意識して研究を推進している。

③ 授業改善チームの実践

職員会議後の「ちょこっと特別支援」ではソーシャルスキルトレーニングの具体例、発達障害の進学・就労、WISC、合理的配慮等について研修した。また、「学習障害とそのアセスメントについて」現職教育を行った。授業の3ポイントについて研究会をもち、「わかる」「できる」「深まる」授業構築の手立てのヒントとして共有したり、気がかりな児童の見取りと対処法について特別支援教育センター及び福大の先生方を交えて研修会をもったりした。

一人一授業の指導案検討及び授業後の研究会を実施し、授業の練り上げや振り返りを確実にを行うことで、翌日からの指導に生かせるようにしている。

④ GIGAチームの実践

職員会議後や終礼でのミニ研修で、Forms、メタモジ、プログラミング、情報活用能力等について学んだ。教育総合研究所と連携した遠隔研修、オンラインによる東京オリンピック壮行会、赤米奉納、クラブ発表会等を実施した。

また、目的に応じたICT活用を意識し、学ぶ意欲を喚起し、意欲を継続できるICT活用の研究を進めている。

III まとめ

(1) 成果

- ① ミドルリーダーが研究・研修の推進役になって動くことで情報発信の頻度が高まった。
- ② 外部機関とつながることが起爆剤になり、自身の実践を客観視することができた。省察して言語化することで、多面的な視点をもち、新たな学びを得た。
- ③ 意識調査で授業に関する数値がアップした。

(2) 課題

- ① 教師の学びのための時間の捻出
- ② 当事者意識の醸成
- ③ 誰一人取り残さない職員室の構築

◎研究協議内容

上田 教員の年齢構成と学級の児童数を教えてほしい。

発表者 今年度は、20代3人、30代2人、50代2人。児童数は、1年生が9人、他の学年は20数人、全校児童117人となっている。1年4年5年担任が20代である。

大石 担任の空き時間はどれくらいあるのか。また、新採用の教員は分からないことが分からないという状況だと思うが、それに対してどう対応しているのか教えてほしい。

発表者 1年担任は新採用なので持ち時数が19時間、他の学年は持ち時数が23～25時間になっている。全ての教員が他の学年への出入りを行っている。新採用に対しては、問い返しを行い、本人の思いを聞いてからアドバイスをしている。

野村 働き方改革の取組について、残業時間の実態はどうなっているのか。教員の退勤時刻は何時頃か。

発表者 集団下校等により児童を速やかに下校させることで、放課後の時間を確保しやすくしている。新採用の教員には、教頭が仕事の進捗状況などについてこまめに声かけをしている。退勤時刻は6時から7時の間がほとんど。6時までは他の教員と相談しながら仕事を進めてよいが、6時以降は、各自で仕事をする時間と決め、全員が自分の仕事に専念できるようにしている。

正玄 発表された取組は、ミドルリーダーが中心となっていた実践なのか。また、成果と課題について、取組を行ってきたミドルリーダーの実感はどうか。

発表者 ミドルリーダーが中心となって取り組んでいる。計画したことを事前に校長と相談しながら進めている。ミドルリーダーの実感については、現在取組が進行中であるので、把握できていない。



◎グループ協議内容

A

- ・さまざまな要因で教員の数が足りなくなっている学校もあり、校内人事のやりくりがとて難しくなっている。
- ・時間を作る工夫として、成績づけの時期などに6限目をカットしたり、通知表の所見をなくしたりと、地域ごとにいろいろな工夫をしていくことが必要だと思う。
- ・教員のモチベーションをどう上げていくかが課題である。プレッシャーにならないような言葉の選択をしていくことが大事だと思う。

B

- ・4月に校長が研究主任に思いを伝え、それ以降は研究主任が中心となって、各学年の推進委員と相談しながら進めている。これにより、推進委員が自覚を持って取り組むようになり、リーダーとしての意識が高まっている。
- ・それぞれの世代でのリーダーを育成していくことはなかなか難しい。
- ・研修を頑張ると時間が足りなくなる。働き方改革を進めていかなければならない。
- ・教科担任制の活用や、会議のペーパーレス化、職員会議の削減などの工夫により時間を生み出すようにしている。

C

- ・モチベーションを上げるために、副担任や指導教員が新任者の思いを聞き、その思いを少しでも生かせるように配慮している。また、声を聞くBOXに入った提案の中で、実行できるものは即実行するようにしている。
- ・時間を生み出すために、朝礼や終礼の廃止や回数削減、通知表の所見削除などにも取り組んでいる。

D

- ・若い職員の価値観を校長としてどう捉え、どう指導していくかで迷うことがある。
- ・中学校の校区内で、小学校の同学年担任同士で意見交換をしているが、効果的である。
- ・教員の年齢構成が厳しい状況では、3年計画など中期的にリーダー育成を進めていくことが大切である。

(文責：越前市武生東小学校 富田 政晴)

研究課題	子どもを取り巻く様々な危機への対応
研究発表題	教職員の危機管理意識および対応力を高める取組

敦賀市立敦賀西小学校長 栗 城 信 市

I 研究の視点

近年、子どもたちを取り巻く社会的な環境は日々激しく変化し、学校が子どもたちの安全・安心を守るために対応しなければならない危機は多岐にわたっている。直近の2年間では、世界が新型コロナウイルスの猛威に襲われ、学校においても三密を回避するなどして感染予防を徹底してきた。言うまでもなく、学校の日常が大きく変化し制限された。また、いじめ、不登校、暴力行為等の生徒指導上の問題はもとより、児童虐待の増加、食物アレルギーへの対応、SNSによる問題等、命に関わる重大な課題も依然として深刻な状況である。さらに、気候変動の影響で100年に一度と言われる大規模な大雨が各地を襲うなど、いつ起こるか予期できない自然災害に対する備えも十全に整えなければならない。

学校は、子どもたちの未来に向けた力と希望を育む場であり、子どもたちの安全・安心を守り切る使命がある。そのために、危機発生に備えた事前危機管理（リスク・マネジメント）および発生後の適切な危機対応とともに再発防止を行う事後危機管理（クライシス・マネジメント）双方への対応力を不断に高めていくことが重要である。

本研究では、市内小学校での実践も交えながら、教職員の危機管理能力の育成および未然防止に向けた体制づくりを推進する上での校長の果たすべき役割と指導性を明らかにする。

II 研究の概要

- (1) リスク・マネジメントの取組
(危機発生に備えた事前の危機管理)
 - ① 通学路の安全確保の取組
 - ・定期的な登下校班による地区集会
 - ・見守り隊による登下校の見守り
 - ・PTA・地域連携の通学路点検
 - ・通学路検討委員会の起ち上げ

- ② 危機に応じた訓練
 - ・ICTを活用した訓練
 - ・過去事例を踏まえた避難訓練
 - ③ 危機意識を高める研修
 - ・情報セキュリティ等教職員研修
 - ・保護者対象SNS講習会
 - ④ 心理的安全性の確保
 - ・職員室経営、協働性の構築
- (2) クライシス・マネジメントの取組
(発生後の対応及び再発防止の危機管理)
- ① コロナ禍における対応
 - ・市校長会での危機管理上の情報共有
 - ・全校集会での心のケア
 - ・学校活動体制の共有化
 - ② 危機管理マニュアルの更新
 - ・更新時のシミュレーション

III まとめ

- (1) 成果
 - ・危機管理マニュアルの実効の見直し
 - ・訓練に対する児童の主体性の向上
 - ・地域との危機管理意識の共有
 - ・目的意識の共有による組織力の強化
 - ・学校間情報共有による対応力の向上
- (2) 課題
 - ・「命を守る学習」の充実
 - ・訓練・研修時間の確保や上積み
 - ・新たな危機への対応力の向上
 - ・危機管理上の家庭・地域との連携

多様化する危機から子どもたちを守るためには、学校や地域の特性を把握した上で実効的に危機管理を行っていかなければならない。また、PDCAによる組織的な危機管理マニュアルの更新、訓練・研修など変化をもたせた多様な取組が求められる。

校長として、今後もリーダーシップを発揮し、学校の危機管理意識の高揚と対応力向上に向けて果たすべき役割に全力を注いでいきたい。

◎研究協議内容

青山 清掃ボランティアとは。

発表者 感染症対策として3ヶ月清掃をやめた際、保護者のボランティアを募り、トイレ・手洗い場を清掃していただいた。教室・廊下は教職員で行った。

青山 通学路の信号機・横断歩道設置要望手順は。

発表者 市教委への報告は毎年出している。その動きを待たずに学校独自でも動き、設置が実現できた。

塚本 会議をなくしたことについて先生方の影響は。

発表者 月1回の職員会議は残している。会議がないと困るという意見はあるが、放課後の職員室で、教職員の対話が増えた。会議をなくしてもできるという感触を得た。小中規模校だからできる面はある。

渡辺 他機関と思いを共有する大切さを学んだ。教職員の危機管理意識の高まりについて手応えは。

発表者 防災担当ではない教職員が当時者意識を持ち、ドライブスルーの引き渡しについて絵を持参し、校長に提案してきた。「子どもたちの安全を守る」という視点で、教育活動を構成していく企画があがるようになった。安全性を確保した出発点のものばかりになった。

◎グループ協議内容

A

- ・年度始めにアレルギー関係等、全員で情報共有しているが、随時アップデートを行い、全員がいつでも見ることができるようになっている。
- ・会議をなくしたが、必要に応じて復活している。
- ・情報管理については、報告・連絡・相談・確認が重要である。情報量は、中学校より小学校の方が少ないと感じる。
- ・情報を担当者が学年主任から順番にあげていく場合もあるが、全員で一括して共有する場合もある。
- ・連絡会議資料として、紙媒体も必要である。
- ・週案は必要である。
- ・支援員さんからも情報を得ている。

B

- ・校外学習における危機管理について、方法を工夫したり熱中症対策を徹底したりしている。
- ・実情に合わせて、学校に防犯カメラの設置を行った。
- ・大雪で緊急下校となり、ドライブスルー方式がうまくできた。その後、新型コロナウイルス感染症のための緊急下校においても、ドラ

イブスルー方式が成功した。経験が大事であると感じた。

- ・緊急下校時に、グーグルフォームで家庭から回答を得た。大変スムーズであった。

C

- ・教職員がAEDや心臓マッサージを実施し、救命できた。児童・生徒もできるようになるとよい。
- ・引き渡しの際、受付でビデオカメラを活用した。
- ・高齢者が亡くなり信号機がついた。児童のために、学校が積極的に動くべきである。
- ・Zoomを使ってお迎えの対応をした。
- ・防災マニュアルは本当に使えるものにする必要がある。
- ・教室から全校放送できる内線電話を利用している。
- ・メールや電話が使えない時の伝言サービス対応を準備している。
- ・地震の避難訓練を休み時間に行っている。

D

- ・1人1研修講師となり、ミニ研修を実施している。
- ・AEDとエピペンについて毎年研修している。
- ・危険箇所や物が多く、通学時熱中症対策も含めて、物理的安全確保や安全点検の工夫が必要である。
- ・大雨の被害を受けて、危機管理マニュアルのアップデートや精査が必要であることを痛感した。
- ・危機管理マニュアルは年1回見直し、危機管理意識を高めている。印刷すると量が多いので、更新部分のみ差し替えている。
- ・C4th導入により、一部の教員の負担が大きくなるのではないか。
- ・通知表等のベース型の作成が大変である。



(文責：敦賀市立黒河小学校 柿本 陽子)

研究課題	社会形成能力を育む教育の推進
研究発表題	地域や学校に誇りを持ち、たくましく生きる児童生徒を育む教育活動の推進 ～ 地域を知り、地域とつながる体験活動を通して ～
福井市湊小学校長 山 本 智 広	

I 研究の視点

福井市では、学校教育目標「郷土福井に誇りを持ち、たくましく生きる子どもの育成」のもと、平成29年度～令和3年度まで、「地域に根ざす『学びの一貫性』」を学校教育方針に掲げ、「系統性のある学び」という縦の視点と「地域に根ざした学び」という横の視点の双方に焦点を当て教育を推進してきた。そのなかから、「地域と関わる取組一覧表」と「中学校区教育」に関する内容を基に、本校が取り組んできた「地域を知る」「地域とつながる」に関する活動を紹介する。そして、地域や学校に誇りを持ち、たくましく生きる児童生徒を育む学校づくりにについて考えていく。

II 研究の概要

(1)「地域と関わる取組一覧表」における活動例
福井市の小中学校では、学ぶことと社会とのつながりを意識し地域連携の質を高めるために、地域と関わる取組を一覧表にまとめ、各教科・領域との関連を図り、目的やつけたい力を明確にしている。

①実践例 6年「湊CMをつくろう」の取組

○活動のねらい

地域の歴史や課題について、地域の団体や有志等の協力を得ながら実際に見たり・聞いたりする活動を通して学んだことをCMにする。それを地域・社会の人々に見てもらうことで、地域への参画意欲を促す。さらには、将来の地域を考えることを通して、豊かな未来社会の実現に貢献する意欲や態度を育む。

○活動の概要

＜活動1 湊地区の歴史を知る＞

- ・「みなと塾」塾長から、湊地区の歴史について学ぶ。
- ・学んだ場所を見学し、新聞にまとめ他学年に伝える。

＜活動2 湊地区の現在の課題を探す＞

- ・「湊ビジョン推進協議会」の会長から、湊地区が抱えている課題について学ぶ。
- ・学んだ課題をまとめ、これからの湊地区の在り方や進むべき方向性を考える。

＜活動3 湊地区をPRするCMを作成する＞

- ・湊地区の魅力を発信することが重要だという話し合いの結果を受け、湊地区のCMを作成する。

(2)「中学校区教育」における活動例

本校は光陽中学校区に属し、9年間で子どもを育てる意識を大切に様々な活動に取り組んでいる。

①実践例 1 4年「小中地域合同清掃ボランティア」

○活動のねらい

校区にある公園の清掃活動を小中学生と地域の方が共に行い、異学年の子ども達が協力し合ったり、地域の方々との交流を深めたりすることで、地域に貢献する喜びを感じさせる。

○活動の概要

校区にある公園の清掃活動を、中学1年生・小学4年生が地域の方と共に行う。活動終了後は、互いに感想を発表し合ったり、地域の方からコメントをいただいたりすることにより、地域に貢献する活動に参加する意欲を高める。

②実践例 2 4～6年「小中地域合同あいさつ運動」

○活動のねらい

登校時に小・中学生と地域の方が共に挨拶運動に取り組むことで、児童生徒の挨拶に対する意識を高め、地域を元気づける活動に貢献する。

○活動の概要

登校時に中学生が母校の小学校に行き、小学生と地域の方と共にあいさつ運動を実施する。その際、地域の方々から温かい声かけをしていただくことで、地域に貢献する意欲を高める。

III まとめ

(1) 成果

- 「地域と関わる取組一覧表」作成のメリット
 - ・体験活動の目的が明確になり、児童につけたい力を意識して実施できた。
 - ・6年間を見越した系統立てた指導を意識することができた。

○中学校区教育に取り組むメリット

- ・小中学生が共に取り組むことで、互いの自尊心や自己肯定感を高めることにつながった。

(2) 課題

- ・コロナ渦で十分な体験活動が実施できない。
- ・新学年の担当者による一覧表の見直しを行う時間が十分確保できないため、活動がマンネリ化してきている。
- ・中学校区教育の活動を負担と感じる教職員の意識改革。

◎研究協議内容

早川 ①「地域と関わる取組一覧表」は、誰がとりまとめているのか。

②地域の方の紹介など「地域の人材活用」の窓口は、どこが行っているのか。

③中学校区教育の会議の頻度はどれくらいか。

発表者 ①学校によっていろいろであるが、本校では、教務主任が中心となっている。各学年の取組については学年主任がまとめている。

②中学校区教育の取組については歴史がある。公民館を窓口としてお願いしている。そこから、さらに他の団体へとつなげている。

③校長が集まる会議は、夏季休業までは毎月開催し、年5～6回程度開催している。先生方が集まる会議は、年2～3回程度である。

早川 本校では、今年度から「ふるさと教育主任」を一人置くようにした。

牧井 ①校区と公民館の所管は重なるのか。

②コロナウイルス感染を気にする地域の方もいると思うが、もどかしさはないのか。

③中学校区教育で取り組んでいる「清掃ボランティア」や「挨拶運動」は授業日に行っているのか。

発表者 ①一致している。

②公民館が学校に寄り添ってくれているので、ありがたい。できる範囲での参加となっている。

③両方とも授業日に行っている。

川端 中学校区教育の会議は、すべて同じ日に実施しているのか。複数校の予定を合わせるのは大変ではないのか。

発表者 同じ日に実施している。

水島 マンネリ化して終わらないように、新しいことに踏み出すカリキュラムを見直す必要があると考えている。

竹本 幼小中12年間の「取組一覧表」を作成している。併設校なので、校内で調整できる。地域の方々には、様々な活動でお世話になっている。

藤岡 教員の取組に対する意識の差はないのか。

発表者 子どもに直接関わっている教員の意識改革をどうするのかは大切な問題と考えている。

◎グループ協議内容

A

- ・教育計画の冊子にふるさと教育のページを作り、見える化している。共有することが大切である。担任や子ども等の意見を取り入れ、見直し、良い形で内容の移行を目指す。
- ・どんな力を子どもにつけたいのかを管理職がしっかり教員へ示すなどして明確にする。

- ・一覧表作成にあたって「つながり」をキーワードにして全職員で取り組むことにより、やらされ感は無くなると感じている。教員は、地域との連絡調整のみを行う。準備から指導等地域の方が行ってくれて助かっている。
- ・「福井県への郷土愛」と、広義のとらえ方で行う。

B

- ・これから統廃合が多くなっていくと思われるので、新しい地域とのつながりを築くことが課題である。
- ・土日の公民館行事に教員を参加させることは、働き方改革としてどうか。
- ・小中連携に対する教員のやる気の差。中学校は、不登校対策のためと思ってやっているが、小学校は目的を分かっていないからではないか。
- ・小小連携の方に意義を感じている小学校教員もいる。

C

- ・新しい取組に抵抗を感じる教員もいるので、管理職のリーダーシップが必要である。
- ・ふるさと教育は、地域を知ることである。
- ・総合的な学習の時間のなかに、ふるさと学習をどのようにいれていくか。

D

- ・ある程度は教員がお膳立てするが、子どもがお客さんになっている。子どもが必然性をもって、目的をもって取り組まないと、肯定感が育たない。
- ・地域の人との活動が、認められる、ほめられる機会になれば、自己肯定感が育つ。
- ・学校外に、頭になる人をつくる。
- ・小学生、中学生ともにメリットがある活動にするべきである。



(文責：福井市社南小学校 荻野 昌映)

研究課題	自立と共生の実現に向けた教育活動の推進
研究発表題	持続可能な社会の担い手を育むためのSDGsの取組や方策

鯖江市片上小学校長 五十嵐靖浩

I 研究の視点

鯖江市では国際目標「SDGs」の理念に賛同し、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指し、「持続可能な地域モデル"めがねのまちさばえ"」の確立を目指している。そこで本校では、スクールプランの「目指す児童の姿」を「持続可能な未来社会の創り手となる児童」とし、SDGsの理念を学校教育活動全般で取り入れることとした。多様な人々が共に生きる社会の実現に向けて、SDGsの学習を通して持続可能なまちづくりを自分ごととして捉え、行動する子どもを育てたいと考える。ここではその取組の一部を紹介し、校長の役割や責任について考えたい。

II 研究の概要

(1) 持続可能な未来社会とは

市環境教育支援センター「エコネットさばえ」の職員を講師に招いて、5・6年生が17の目標を達成する体験型学習カードゲームを用いてSDGsについて学習した。経済、環境、社会の3つのバランスが取れた2030年の世界を自分たちで作り上げることで、今後必要とされる具体的な行動について学ぶことができた。5年生はその後、地球温暖化防止のすごろくゲームを用いて環境について学習した。

校長の役割は、関係団体との連携である。本校のスクールプランに沿った活動であることを説明し、「目指す児童の姿」を理解して指導いただいた。

(2) 発展学習として

6年生は「私たちにできること」と題し、グループに分かれて調べ学習と発表会を行った。環境問題だけでなくいじめなど校内で身近にある問題を取り上げ、共生社会を作り上げるための具体的な行動を考える良い機会となった。

また校内に向けた発信として、委員会企画で最近のうれしかったことや友達の良い行動などを書くメッセージカードを入れる箱を設置した。「今日ハピ」と名付け児童玄関に掲示し、給食時間にも紹介している。

職員会議で校長は、このような活動がポジティブ教育やいじめ防止対策の一環となっていることを確認し、児童の主体的な行動を称賛するよう意

識付けをした。

(3) 家庭・地域への広がり

本校は、家での手伝いを推奨しており、定期的に「お手伝いカード」を持ち帰り、保護者とともに実践を振り返っている。6年生は「自分たちにできるSDGsのお手伝い」を考え、下級生に提案した。その後、ごみ・資源物の分別を家庭で実践する児童もいた。

5年生の家庭科では、SDGsに配慮した整理・整頓について、タブレットを家に持ち帰り自分の実践を撮影し、クラスでその内容を発表し合った。「家庭で整理整頓に心がけるようになった。」という家族の声があった。

また、6年生が市消費生活センターの出前授業を受け、人や社会・環境に配慮した消費行動のエシカル消費について学んだ。その後、普及・啓発活動としてアピール動画作成を計画し、完成後に公民館等へ寄贈した。また、近くのスーパーでちらし配布やエシカル商品おすすめマークの掲示などの宣伝活動を行った。

校長は地域や関係機関との連携がスムーズに進むように、担任に対し指導・助言を行った。

III まとめ

(1) 成果

校長がスクールプランの中で、SDGs理念の「持続可能」をキーワードとして強調したことで、すべての教育活動の見直しを図り、活動目的が明確か、次年度以降も負担なく活動を持続することが可能かなど、全教職員に意識を高めることができた。

また児童には、学習した内容を学校内だけでなく家庭や地域へと広げる必要があることに気づき、自ら発信していこうとする動きが見られた。

(2) 課題

SDGsが理想だけに終わらず、児童自らが行動する原動力となるようにしたい。そのためには持続可能な内容での設定と、目指す児童の姿と照らし合わせたPDCAサイクルを組織的にを行い、学校全体で検証する必要がある。校長がリーダーシップを発揮し、適切なカリキュラムマネジメントを進めていかねばならない。

◎研究協議内容

北川 ①どれくらいの頻度で、スクールプランの振り返りを職員会議等で行っているのか。②タブレットを家で活用していると思うが、タブレットの持ち帰りの状況を教えてほしい。③アピール動画制作からの一連の流れがどのようにできてきたのかを教えてほしい。

発表者 ①最初は2ヶ月に1回と考えていたが、主体的にと言われてもびんこないので、分かりやすい言葉を使うようにした。授業では「わくわく」を、主体的には「やってみよう」を合言葉にした。「やってみよう」を掲示したり集会で話したりすることで、子どもや教員にも「やってみよう」が合言葉になって、いろんな場面で使われるようになった。②タブレットの持ち帰りは、回数的には少ない。課題があるときに、金曜日に持って帰って月曜日に持ってくるなど、曜日を指定して持ち帰らせている。③市の消費生活センターに間に入ってもらい、相談しながら進めた。実際に動いたのは担任で、校長は報告、相談の中でアドバイスをを行った。スーパーでエシカル商品を掲示するアイデアは、子どもと担任の話し合いの中で出てきた。

瀬戸 家庭や地域の方にSDGsの活動を理解し協力してもらうために、特にやっていることはあるか。

発表者 特別にやっていることはない。学校では、SDGsの小さくくりとしての考え方、「平等」、「地球のために」を学ばせたい。環境だけでなく、人権やジェンダーについても学習していきたい。一つ一つ単発的に協力をお願いしている。

濱野 校長のリーダーシップの話も出てきたが、先生方の自主性、自立性を育てるために気をつけていることはあるか。

発表者 職員室で他の先生のやったよいアイデアを周りの人に話すことで、橋渡的に広めるようにしている。職員室で雑談的に話すことで、自分も「やってみよう」という雰囲気になっている。パーベキューの炭のように、ある程度火がつけば全体に広がっていくので、消えかけた頃にまた扇ぐようにしている。



◎グループ協議内容

A

- ・校長のリーダーシップについて、「これをやるからついてこい。」ではなく、先生方の自主的な考えを生かしていきたい。しかし、校長の大きなビジョンは必要である。思いを伝えて後は先生方に任せるかたちが大事なのではないか。
- ・校長のビジョンをおろす時に教頭、教務を使う。
- ・中学校では担任、学年主任、部長、教頭、校長の流れができていますが、小さい小学校では、担任から直接校長に話ができることがあり、教頭が残念に思うことがある。
- ・教頭の事務時間の確保が難しい。教員の超過勤務は抑えられたが、教頭の超過勤務はなかなか改善されない。

B

- ・特別支援学級が3クラスあり、3人のチームで支援を行っている。学校全体でサポートしている。
- ・知的と自情の児童がいるのに1クラスしか特別支援学級がなく、支援員も少ないので人員配置に苦労している。
- ・スマートルールは親子で話し合い、自分たちで決めて取り組み、責任をもたせるようにしている。
- ・中学校区でメディアマスターの取り組みを長く続けている。

C

- ・鯖江市ではSDGsセンターがめがね会館にあり、環境面での取り組みが中心ではあるが、何らかの形でSDGsに取り組んでいる。
- ・通知票の所見欄をなくすと保護者会で説明する内容が増え、保護者会の持ち方を考えないといけなくなるのではないか。

D

- ・県SDGsパートナーに大野市内の学校全部が登録して取り組んでいる。管理職はバッジを付けている。
- ・校務分掌にもSDGsを明記し、SDGsを頭にした組織づくりを行っている。

(文責：鯖江市吉川小学校 鳥居 秀行)

研究課題 家庭や地域との連携・協働と学校段階等の接続の推進

研究発表題 ふるさとCMづくりを通して、
地域や外部機関との新たな連携の構築

坂井市立春江西小学校長 井 口 敬 雄

I 研究の視点

コロナ禍の現在、我が校において、感染への不安、事業所の規模縮小などにより、地域や外部機関との連携が難しい状況となっていた。しかし、子どもたちの学びの保障という観点から、このような状況に甘んじることなく、地域や外部機関との連携・協働の取組を行うことが喫緊の課題であった。

そこで、県小学校長会の研究視点である「家庭・地域等と連携・協働を深め、創意ある教育活動を展開する学校づくりの推進」から、県の事業である「ふるさとCMづくり」を通して、「地域や外部機関との新たな連携の構築」を行うための校長の役割を考えていきたい。

II 研究の概要

地域や外部機関との新たな連携を図るため、5年生にCMづくりコンテストへ参加するよう提案する。

『ふるさと春江西の魅力を大発信』をテーマに、5年生が活動を開始する。春江西部地区のお宝を見付けたり、再認識したりするためには、子どもたちの経験はもとより、家庭、地域からの情報が必要である。以下のように子どもたちは見付けてきた。

(1) CMづくり

①春江西部地区のお宝のピックアップと魅力発掘

ア 田園が広がり、米づくりが盛ん

イ 南北にえちぜん鉄道が走る

ウ 文化活動の拠点ハートピア春江がある

エ 本堂地区の観音堂・観音院の門（市指定文化財）

オ 継承されている春江町伝統民謡踊り「でんすけ踊り」

②魅力を調べるための連携先

ア JA 福井県春江支店、
農業法人「アグリエスケー」

イ えちぜん鉄道

ウ 坂井市文化振興事業団

エ 春江西部地区長会、
春江西コミュニティセンター

オ 坂井市商工会

各連携先の協力の下、クラスごとのCMが完成する。

(2) 新たな展開

CMづくりの過程で、外部機関との連携先等を模索する中、新たな連携が生まれた。坂井市には、公民館（コミュニティセンター）ごとに、まちづくり協議会という組織がある。そこが企画している行事で、CMの披露および、ワークショップへの参加依頼を受けた。

(3) 校内や地域で発信

子どもたちが「まちづくり計画」のワークショップに参加。制作したCMの披露後、『安全安心 環境が守られる地域』、『住民同士がいきいきと交流できる地域』等をテーマにしたワークショップに参加して、自分たちの意見を提案する。

(4) 新たな連携

まちづくり協議会との新しい連携が生まれた。令和4年度になって、1年生から3年生が学校農園を活用した野菜の栽培と、収穫祭の実施。5年生のまちづくり計画のワークショップへの継続的な参加が決まり、5年生は総合的な学習の年間計画の中に、これらの取組を位置づけた。5年生だけの連携ではなく、他学年との連携も新しく始めることになった。

III まとめ

CMづくりを通して、校長がリーダーシップをとり、「地域や外部機関との新たな連携の構築」を推進してきた。その過程の中で、まちづくり協議会との新しい連携を生み出し、お互いの利益が一致した関係を築くことができた。やはり大切なことは、校長を先頭に教職員が一丸となって、多くの方とコミュニケーションを取り、どのようなことをしていきたいのかを伝えることである。その思いと相手側の思いが合致したとき、新しい関係が生まれていくことを痛感した。今後も学校の実態に応じた関係づくりを目指していきたい。

◎研究協議内容

小林 まちづくり協議会と学校をつなぐパイプとしての校長の関わり方を教えてほしい。

発表者 まちづくり協議会は学校には入らず連携がなかったが、「何かお手伝いできないか」という声かけがあり、間に入って聞き、5年生にも伝え、学校ができることとできないことを考えながら進めた。

安達 保護者や地域個人との連携があったら、知りたい。へき地複式校なので、ふるさと教育の進め方として教えてほしい。

発表者 図書ボランティアの方がいる。外部機関の要請で、福祉協議会から、車いす体験や盲導犬を連れている方の話を聞く活動のアプローチがあった。

地村 30秒のCMづくりをする上で、校長としてのアドバイスや助言があったら教えてほしい。

発表者 子どもたちがグループで地域取材するときに引率したり、動画の編集は子どもたちだけでは無理があるので手伝ったりした。

加藤 まちづくり協議会のワークショップの参加など、もう少し教えてほしい。

発表者 土曜日の10時頃から、5年生の子どもが半分弱参加した。子どもらしい意見がたくさん出て、まちづくり協議会の方たちも喜んでいた。

青木 阪谷小はCMコンテストで優秀賞をいただいた。今後、本校ではSDG'sにつなげていくが、今後の活動へのつなぎはどうされるのか。

発表者 今年度も5年生が継続した活動をしていく。

佐々木 CMづくりで昨年と今年は児童も変わる。町内で交流して持続可能なものにしたい。

富坂 立待小では公民館学級というのがあって、祭りのオープニングに吹奏楽が発表している。運営委員のメンバーになっているが、職員の関わり方、土曜日の関わり方を教えてほしい。

発表者 教頭が窓口で、担任の負担はない。

山岸 みかん農家との活動を大学と連携してSNSで発信している。新たな取組の話がきたが、窓口は教頭ではなく、郵便局が主催になりつつある。

林 家庭地域学校協議会は、コーディネーターを農業と歴史で色分けしている。県や市依頼は教頭が窓口。朝倉ガイドの活動を、地域の活動に移行したい。

佐藤 コロナ禍で、千人近い敬老会には児童が手紙を作って渡した。

橋本 千人以上の大規模校、コロナ禍の園小連携で、今年は1年生が10園と一つのあんどん作りを半分ずつ行い、公民館祭りに展示し見に行く。

◎グループ協議内容

A 今地域としている活動は、負担なく盛り上げた方がいい。SDG'sの17のうちどれに当たるかつながるよう、校長として教員に働きかけた。伝え続けることで成果がある。校長が地域に出て行くことでつながりができ、お願いもしやすくなる。発信の場を作るのも校長の役割。地域の方への恩返しとして、学習発表会に来ていただく。

B いろいろな団体との関わりがある。教頭を軸にカリキュラムマネジメントをした。学校ではなく窓口を外部に移行した。学校と地域の窓口は校長。150周年などで、PTA会長と密な連携ができているのがよい。公民館長と校長が窓口になることもある。校長と教頭の役割分担をして、教頭の負担を軽減した。子どもは地域の宝、教員が地域行事に参加した場合休みを取らせたい。

C 保幼小連携やゲストティーチャーなどコロナ禍でも気を付けながら交流している。小規模校ならではのつながりを大事にしている。外部に向けては教員がやめる方向へ行きがちなので、校長としてどう出るか声かけを考えている。地域なしでは教育は進まない。行政からの依頼を教育計画に入れづらい場合、校長がいかに止めるかが課題。

D 学校に依存しすぎていないか、学校教育でやるべきことと、地域の教育力を高めていく場の線引きが必要。ふるさと愛は育成したいが、地域も子どもを育てるべきで、校長としてはブレーキとアクセルの踏分が必要。子どもがやりたいことからスタートするCMづくりも、ふるさと教育として校長が指示・承認・責任をもって、更新していく。

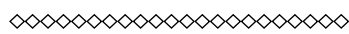


（文責：坂井市立大石小学校 小林 佳世）

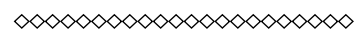
福井県小学校長教育研究大会主題・副題一覧表

年度	大会主題（副題）	開催地
55	世界から信頼される誠意と信念に満ちた日本人の育成 （新教育課程のめざす豊かな人間性の追求）	東海・北陸 福井大会
56	人間性豊かな児童の育成をめざす小学校教育 （創意ある教育経営の実践）	大野市
57	人間性豊かな児童の育成をめざす小学校教育 （意欲あふれる小学校教育の創造）	武生市
58	人間性豊かな児童の育成をめざす教育の創造 （教育経営理念に立つ自校の教育構想と展開）	小浜市
59	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 （副題なし）	鯖江市
60	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 （副題なし）	坂井郡
61	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 （副題なし）	敦賀市
62	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 （自ら学び、豊かな心を持ち、たくましく生き抜く子どもの育成）	東海・北陸 福井大会
63	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 （厳しく自己確立をめざす子どもの育成）	勝山市
平元	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 （信頼と愛情につながる育成を求めて）	大野市
2	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 （心豊かにたくましく生きる子の育成）	武生市
3	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 （世界をみつめ、広い心をもつ実践力のある児童の育成）	小浜市
4	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 （自ら学ぶ意欲とたくましい実践力のある児童の育成）	鯖江市
5	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 （心豊かにたくましく生きる子どもの育成）	坂井郡
6	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 （豊かな心を培い、たくましく生きる子どもの育成）	福井市
7	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 （自己確立できる人間を育てる学校像の創造と具現）	敦賀市
8	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 （自ら考え、主体的に判断し、心豊かで、たくましく行動できる児童）	勝山市
9	第49回全国連合小学校長会研究協議会 第32回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究大会	福井市
10	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 （自ら生きる力を切り拓き、21世紀にはばたく子どもの育成）	武生市
11	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 （個性を尊重し合い、豊かな自己実現を目指す児童の育成）	小浜市
12	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 （豊かな心と自己実現を目指す確かな力をもつ子どもの育成）	鯖江市
13	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の推進 （豊かな感性と確かな知性をはぐくむ学校経営を目指して）	坂井郡

年度	大会主題（副題）	開催地
14	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな力を持ち、共存社会を生きる児童の育成）	大野市
15	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心とかかわる力を持ち、共に生きる児童の育成）	三方郡
16	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と自ら学び続ける力を持ち、たくましく生きる子供の育成）	東海・北陸 福井大会
17	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心とたくましく生き抜く力を持ち、共に歩む子供の育成）	武生市
18	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力をもち、たくましく生き抜いて自己実現を図る子どもの育成）	高浜市
19	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力をもち、健やかでたくましく生き抜く子どもの育成）	鯖江市
20	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進（確かな学力をもち、心豊かにたくましく生きる子どもの育成）	坂井地区
21	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力をもち、自立と共生を目指す子どもの育成）	勝山市
22	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力をもち、未来を拓く子どもの育成）	敦賀市
23	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢をもってたくましく生きる児童の育成）	東海・北陸 福井大会
24	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて挑戦する子どもの育成）	越前市
25	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	若狭町
26	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	越前町
27	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	坂井市
28	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	大野市
29	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	敦賀市
30	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	越前市
令元	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	小浜市
2	自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進（夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する学校経営）	東海・北陸 福井大会 （紙上発表）
3	自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進（夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する学校経営）	鯖江市 （オンライン）
4	自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進（夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する学校経営）	坂井市



あ と が き



3年ぶりの参集型による第74回福井県小学校長教育研究坂井大会。福井県教育委員会教育長 豊北欽一様、坂井市副市長 新開和典様をはじめ、多数のご来賓をお迎えして、ハートピア春江と春江中学校を会場として開催いたしました。

コロナ禍に加え、直前の豪雨による交通事情の悪化もあり、実施が危ぶまれた大会ではありましたが、皆様のご理解とご協力により、全日程を予定通りに進めることができました。ご参加いただきました皆様には改めて感謝申し上げます。開催に当たっては様々なご意見をいただきましたが、県内の校長先生方が一堂に会し、直接顔をつきあわせ情報交換ができたことは貴重な機会になったと考えています。

本大会は、「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す 小学校教育の推進」を主題として、学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性について8分科会で研究や実践が紹介されました。また、研究協議では提案者の事例を基に意見を交換する中で、自らの考えを広げ、深め、改めて校長としての使命感を認識したのではないのでしょうか。

皆様におかれましては、坂井大会の成果を収録した本研究紀要をご一読いただき、今後の本県小学校教育推進の一助にいただければ幸いに存じます。本大会において、貴重な提案発表をしていただいた各ブロックの校長先生方、そして、記録・編集等の任に当たられました関係各位のご苦勞に対しまして深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、本大会のために、細部にわたりご指導・ご支援をいただきました福井県教育委員会、坂井市、あわら市、並びに緻密な準備・円滑な運営に誠心誠意ご尽力いただきました坂井地区の校長先生方に心より感謝申し上げ、お礼の言葉といたします。ありがとうございました。

福井県小学校長教育研究委員長
坂井市立磯部小学校長

多 田 敏 明